

# 第1章 戦場

## 朝鮮からの引き揚げ 收容所での本当に過酷な体験

砂子田寿美子さんのお話から

私は大正十一年（一九二二年）、京都府舞鶴市上安で生まれ、余内尋常小学校に入学しました。舞鶴は軍隊の町で、東に海軍、西に陸軍があり、日曜日になると兵隊であふれるような街でした。

女学校を卒業して、十八歳のとき、朝鮮にいる日本の軍人と結婚することになりました。夫は結婚式のために年末年始の休暇に舞鶴に帰ってきてくれました。昔の結婚式は、ほとんど自宅でした。私は、仲人の家で親族だけで式をすませ、新婚旅行を兼ねて朝鮮に渡りました。兄弟や母親が別れを惜しんでいたのを覚えています。悲しくて、たくさん泣きました。

私が行った羅津は本当にきれいなまちでした。大きな軍港もあり、今の小樽のようにフェリーや貨物船も入ってきていました。当時の朝鮮は日本の領土（植民地）でしたから、日本人もたくさんいました。春はスズランがたくさん咲いて、とてもすてきなところでした。近所の子どもや若者たちと集まって、ダンスをしたり、歌を歌ったりして楽しみました。その間、私も三人の子どもに恵まれました。

三人目を産んで間もない昭和二十年（一九四五年）八月九日、夜中にすごい物音がしました。爆弾と照明弾、そして艦砲射撃です。窓は割れ、外は真っ赤な火の海のようなのでした。外では「空襲警報」と叫んでいる兵隊たちが走っていました。ソ連が参戦したのです。戦況が厳しくなり、大きな爆弾を落とされたらしい、日本も負けるかもしれないという話を聞いていましたが、本当に驚きました。主人は一週間も軍隊の司令部に行ったまま帰ってきません。

○羅津 現在の朝鮮民主主義人民共和国（北朝鮮）北東部に位置する町。表紙裏地図

○朝鮮は日本の領土 日本は明治四十三年（一九一〇年）、朝鮮（韓国）に日韓併合条約を成立させて日本の領土とし、武力を背景にした植民地支配を進めた。

○照明弾 空中で炸裂し、強い光を発する装置

の弾丸<sup>だんがん</sup>。夜間の敵の監視などに用いる。  
 ○艦砲射撃<sup>かんぱうしゃげき</sup> 軍艦に備えてある大砲などから弾丸<sup>だんがん</sup>を発射し、ねらい撃つこと。

空襲、爆弾<sup>ばくだん</sup>、銃撃<sup>じゅうげき</sup>で、私たちはどうにもできなくなりました。私はまだお産して八日目、まだ体が思わしくなかったものですから、一緒に来てくれた兵隊さんに四歳と二歳の子どもをお願いして、連れて逃げていただきました。私は一番下の子どもをおんぶして逃げました。一昼夜経過<sup>いちちゅうやけいか</sup>し、ソ連の兵隊の上陸が始まっていたという情報が入ってきました。早く逃げないとだめだと言うのですが、どちらへ逃<sup>に</sup>げていいか分かりません。とにかく南の方に行こうということで、グループをつくって南下<sup>なんか</sup>していきましました。見つければ銃<sup>じゅう</sup>で撃<sup>う</sup>たれます。逃げて二日目、山の方のできるだけ身を隠<sup>かく</sup>せるところへ逃<sup>に</sup>げ込むことができました。

逃<sup>に</sup>げ込んだ山の中では、お腹<sup>なか</sup>の大きい女性やお年寄りがみんな首を吊<sup>つ</sup>って死んでいました。小さな子どもたちの遺体<sup>いたい</sup>もあちらこちらにあるのです。そんな中を私たちグループは、野宿<sup>のじゆく</sup>をしながら逃げました。昼間は特に見つからないように逃<sup>に</sup>げなくてははいけません。空<sup>あ</sup>き家<sup>や</sup>に入っ



ソ連軍の攻撃の様子

イメージ図

て何か食べるものを探し、ご飯があれば、それにお砂糖をかけてでも子どもたちを食べさせながら生き延びました。

咸興という場所に着き、ぎゅうぎゅう詰めつづの貨物列車かもつれっしゃに乗ることができました。トイレもその中とするより仕方がないので、ものすごい異臭いしゅうでした。それでも表に出れば撃たれまがまんすから、みんな我慢して乗っていたのです。

その列車の中で、日本が八月十五日に降伏こうふくしたと聞かされました。私たちは十日以上も逃げていたので、十九日くらいでしたかね。まさか負けるとは思っていなかったので、みんなは泣きながら話していました。

そのうちソ連の兵隊に見つかってしまいました。みんな降ろされて、避難民収容所ひなんみんしゅうようじょへ鉄砲を突つきつけられながら行きました。

小さな子どもたちは食べ物がないので、栄養失調えいようしつちょうになりました。その後、食べ物を少しずついただけになるようになりましたが、小さな赤ちゃんは、毎日二人、三人と死んでいきました。大人も頭から頭にシラミが移うつっていき、そのシラミによって

○栄養失調 栄養の不足  
で健康を損こなうこと。



イメージ図

遺体を投げ入れる様子

○アmeerバ赤痢 赤痢アmeerバで感染する消化器の病気。

アmeerバ赤痢になって、昨日までは生きていた方が今日は亡くなっているのです。

私も、子ども二人を亡くしました。現地に住んでいた方に空き箱をいただいで、その中に子どもを詰めて、收容所にいた男性に背負ってもらって山まで運びました。同じように、子どもを亡くした方がたくさんいました。私はまだよかった方です。箱にも詰められない、何もしないで山に葬らなければいけない人もいました。そして、翌日に次の方を運んでいくと、遺体がキツネに食べられているのです。本当に無残な姿でした。みんな耐えられなくなって、ソ連の兵隊にお願いして、深い穴を二つ掘ってもらいました。その穴に遺体を投げ入れるのです。そして、上から少し土をかぶせます。毎日、たくさん死人が出ました。みんなそこへ投げ込んで、お墓にしました。一度行きたいと思っっているのですが、現在は北朝鮮なので行けません。男の人は軍隊で働かされました。女性も、いすをつくらしたりする仕事をしました。そうして少しのお金をいただいで、その中から、みんなで出し合っって食べ物を買うのです。しかし、お魚の頭でもいいからと魚屋にお願いしても、朝鮮の人は売ってくれません。日本人に支配されていたので恨みがあっって日本人には何も売ってくれないのです。生活は本当に厳しくなっっていきました。

收容所のお寺で出産をした方もいました。私はお産婆の経験も何もないのですが、女同士みんな取り上げて、お産をしました。しかし、お母さんは助かっっても、産まれた子どもはほとんどが死んでしまいました。本当に本当に過酷な体験でした。

DATA

平成22年度北区平和事業

聴き取り

- ・平成22年10月22日
- ・北九条小学校



砂子田寿美子(いさごだ・すみこ)さん

- ・大正11年(1922年)生まれ
- ・札幌市北区在住

收容所での本当に過酷な体験